

Title	<雑録>イランだより
Author(s)	羽田, 明
Citation	東洋史研究 (1959), 18(2): 223-224
Issue Date	1959-10-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/148139
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

イランだより

京都大學中東學術調査隊に参加されている羽田明教授より、間野助手及び編輯子宛に左のような手紙が届いた。これは私信の形は取られているが、文中にも見られる通り先生が出發前に、イランから「東洋史研究」に何か書いて送ろうという約を果されたもので、こゝに私信の一部を含めて掲載する。

(狩野)

拜啓 イランに來てから既に三カ月に近い日が経ち、厭でも應でもアフガニスタンへ旅立たねばならない日が近附いてきました。ペシヤル東北五〇料の Shagahi にキャンプを構えた水野教授からは、しきりに我々といつても吉田、末尾、井本三君のような若手への來着を待つ旨の督促狀が來ている状態です。岡崎敬君が學校の關係で引上げた後の手不足如何んともし難いのでしょうか。それにトウッチ教授を隊長とする二十數人のイタリア隊がスワット河の流域で發掘中なので、水野教授としては、是が非でもある程度の成果を挙げねばならぬという氣の毒な状況のようです。従つて出國手續、殘務整理等以後一週間乃至十日程必要として十月早々には、アフガニスタン經由、パキスタンに入ることになります。今から書き送つたのでは小生等の歸國後に掲載されることになるでしょうが、東洋史研究との約束を果す最後の機會と思いますので、約束を守らぬよりはましと考へて、今までの旅行の印象を取まとめてお送りします。(後略)

土の文化

七月一日の午前二時半、テヘラン西郊のメヘラバード空港に降り、アスファルトの鋪装道路を二、三十分突走つてテヘラン市内のホテルに入つた小生には、人口百五十乃至二百萬といわれるこの大都市がすぐく近代的に見えたものです。テヘラン第一のメイン・ストリートであるシャー・レザーの大通りなど、真中に芝生を設け、螢光燈の照明を施し、兩側にはプラタナスの並木が續いていて、一見大阪の御堂筋や東京の御幸通より遙かに奇麗です。處々に廣場があつて、照明された噴水があるのも仲々氣がきいています。諸官廳にしても、テヘラン大學にしても、日本のそれらより遙かに立派にみえるものがありますし、建築ブームでどん／＼建築中のビルやアパートにも仲々モダンなものがあつます。そこへ寒い自動車の洪水で、深夜でも交通の途絶える時がなく、往來に面したホテルの部屋では、暑さに加えてその騒音で寝難い位でした。これがテヘランの第一印象でした。

一夜明けて大使館へ挨拶に行つたり、偶然大使館で會つた東大の江上教授などとお晝にこの國の名物の羊の焼肉料理(チエロ・キヤバーブ)——これ以外に實は何もないといつてもいい過ぎではありません——を喰べに行つたりした時から強く印象づけられたことは、この町にはコンクリート建築、木造建築はなく、すべてが煉瓦か泥で出來ている事實でした。表面に華麗な大理石など張付けた建築も中味は煉瓦で、ホテルの窓から見る民家などは、壁は煉瓦でも屋根は粗末な木の梁の上に粗朶の様なものを竝べ、その上にじかに泥を厚く塗り附けただけの平屋根が多い様です。(ほとんど雨の降

らないこの國では、これで十分なのでしよう。目下建築中の十六階建てのアングロ・イラン石油會社の社屋を除けば、この國の首都であるテヘランが、煉瓦か泥の家ばかりから出来ていることは確かに象徴的です。お隣りのトルコでは、寺院や宮殿は勿論、民家の多くが石を素材に使っているのと較べると、對照的ともみられます。ビザンツの傳統をつたえたトルコの文化を假りに石の文化とすると、この國の文化は土の文化と呼んで差支えないでしよう。

勿論、ジャングルが残っているカスピ海の沿岸地方には木造の家がありますし、サーファヴィー朝の舊都イスパハーンには恐らく杉の類と思われる巨木を柱に使った宮殿などもみられます。またベルセポリスをはじめ、アケメネス朝、アルサケス朝、ササン朝の遺跡には石造建築がふんだんに残っています。ただこの様な地方的もしくは時代的な例外を別にすれば、イスラム以後のイランの生活と文化は全体として土に密着して成立っているように思われます。以前に笠間晃雄氏がその中近東旅行紀に「砂漠の國」という表題を附けているのを見て、イランに關する限り不穩當な様な感じをもつたものです。むしろ高原とオアシスの國と名附けるべきだというのが、物の本で漠然とこの國のことを知っていた當時の小生の理窟であり、ロマンティズムでもあつたわけです。事實、方々を旅行してみても遊牧民の姿のみられるステップと農耕民の集落のみられるオアシスの交錯する状態も理解しました。併し、それは何と乏しい草地であり、また何と狭少な耕地でしょう。本當の砂漠はルド砂漠位しかないかも知れないが、日本人である我々からみれば、笠間氏のことは通り、この國は正に「砂漠の國」に違ひありません。セメントはやつと自給自足する處まで來たそうですが、その他の礦物資源はあつて

も極く少規模にしか利用されず、製鐵の様な基礎産業さえ未開發といつていいこの國では、手取り早く何でも土で間に合せるわけでしょう。この自然的環境の上にイスラムの偶像否定の精神も加わつて、イスラム以前にはあれ程さかんだつた石の彫刻も跡を絶てば、石造建築自体も忘れられていつたのでしよう。イスラム以後の王朝の大部分が非イラン系、遊牧民系であることも無關係でなかつたかも知れません。イスラム以後の美術品でもつともすぐれている陶器は土の文化の代表的なものではないでしようか。今も昔ながらの技術でつくられている絨毯や金屬器には遊牧民の文化や嗜好が明かに反映していると思います。現在のテヘランは天與の石油の利潤で砂漠に經營された近代都市ですが、かつてのベルセポリスやスーサにしても、やはり同じようなものではなかつたのでしようか。假令、それらの首都を培つた經濟力は石油ではなくて、隊商貿易の利潤、或は被征服民族からの貢納であつたにしても。

「博物館廻り」と、出来ればこの國の歴史研究の現状についてふれ度いのですが、「博物館廻り」は今日は時間がないので、後便に譲ります。學界消息は未だ準備が不十分なので恐らく歸つてからにしたいと思います。惡しからず。

九月二十五日

羽田 生

間野 潜龍 様
狩野 直禎 様